No. 1 《褐釉白斑壺（南蛮芋頭水指）》時代不詳　産地不詳　M1201

No. 2 《青花方形壺（安南四方水指）》17世紀　ベトナム　M1199

No. 4 《青花思字文盤（安南思字平鉢）》17世紀　ベトナム　M1319

No.14《鉄絵花文合子（宋胡録鉄絵合子）》15世紀　タイ、シーサッチャナーライ窯　M2390

No.17《青磁面取双耳瓶》15～16世紀　タイ、パーン窯　M1711

No.25《白釉花弁文盤》15～16世紀　ミャンマー　M2397

No.31《青磁花文盤》15～16世紀　タイ、パーン窯　M2407

No.37《黒褐釉鳥飾水注》12～13世紀　クメール　M2901

木村定三コレクション東南アジア陶磁目録

凡例

・本目録は、愛知県美術館所蔵「木村定三コレクション」の中から東南アジア陶磁を掲載し、解説を付したものである。

・各作品名は、調査者である矢島律子氏（鶴見大学）の見解を勘案して決定した。（　）内には、学術的な見解に基づく名称とは別に、茶道具としての呼称を併記した。なお、外国産の陶器に「青花」、日本産の陶器に「染付」という呼称を適用している。

・各作品のデータは、作品名、茶道具としての呼称、制作年代、寸法（cm）、産地、コレクション番号、受入時名称の順に記載した。

・掲載は調査者の監修のもと、由来にそって大別したうえで、産地および制作年によって分類した。

・作品解説は矢島氏が執筆した。

・矢島氏による調査は2016（平成28）年に実施された。また、森達也氏（沖縄県立芸術大学）には、矢島氏の紹介はじめ、様々な助言、協力を得た。

編集　愛知県美術館　中村史子

（1）茶道具

a．安土桃山時代から江戸時代前期に、現地で生産の後、日本に将来されて「見立て」により茶道具となったもの

1．褐釉白斑壺（南蛮芋頭水指）

高さ19.4、口径12.6、胴径21.5、底径10.2
産地不詳
M1201南蛮芋頭水指

里芋のような特異な形をした壺は「南蛮芋頭水指」と呼ばれ、萬暦の年号が彫り込まれた作など類例がいくつか知られている。しかし、作行きには幅があり、年代・産地は特定されていない。軽く粗い土で作り、鉄泥を全面に塗布し、腹部にさらに２か所白化粧を斑に塗り付けている。蓋は「ハンネラ」と呼ばれる土器製の蓋で、蓋だけを東南アジア方面から輸入し、後から水指など様々な容器に合わせて使ったと思われる。

b．日本の注文により現地で生産された「注文手」

２．青花方形壺（安南四方水指）

17世紀

口径13.0×13.0
総高18.2
（蓋）高さ1.2
（身）高さ17.0、最大幅13.7、底径10.5×10.3
ベトナム
M1199安南染付耳付水指

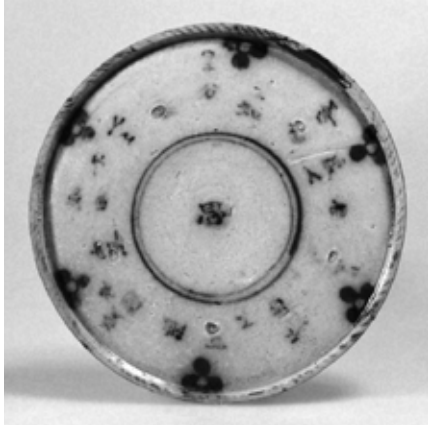
方形の耳付壺はベトナム国内にはない器形で、日本からの注文品と考えられる。型造りではなく、円筒形に轆轤でひいたのちに、四面を板押しして方形にしたものと見える。文様は釉薬と青花の不調和から滲み流れてはっきりとしない。日本ではかえってこの滲みが「絞手」と呼ばれ、見どころとされた。岩と草木であれば、15世紀以来ベトナム青花にしばしばみられるモチーフである。

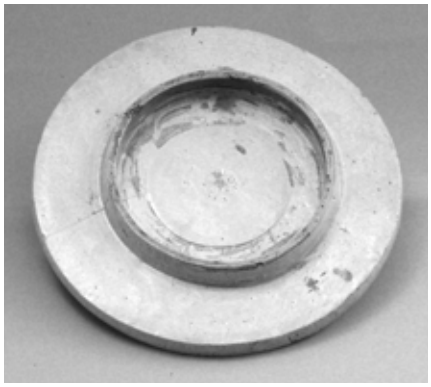
３．青花蜻蛉文輪花皿（安南蜻蛉文皿）

江戸時代

高さ3.7、口径19.5～20.0、底径8.6
日本　京都周辺
M1318安南染付菓子器 蜻蛉図（表）狩猟図（裏）

皿の見込みに蜻蛉あるいは蝶のような虫が描かれている。高台内に重円圏と「喜」の字が青花で描かれているが無釉のため黒く発色している。伝世品に同サイズで絵代わりの菊形皿が複数知られているほか、堺環濠都市遺跡や京都市内から類例が出土している。それらの多くは呉須が滲んでいるが、本作品は滲んでおらず、全体に黄色味が強い。文様表現に若干疑問が残るものの、類例がないわけではないので、焼きが甘い作例とみて、江戸時代初期のベトナムへの注文制作の一例としておく。





４．青花思字文盤（安南思字平鉢）
17世紀

高さ3.3、口径23.0、底径14.0
ベトナム
M1319安南染付鼓形平鉢

豆（とう）という儒教の祭器の脚を無くしたような形状であり、管見ではベトナム国内の類例はない。日本国内には類例がある。見込み中央に「思」の字とそれを中心として放射状に様々な文字が書かれているが、絞手風に滲んでいることもあり判読が難しい。白化粧はなく、青灰色の透明釉が覆っている。素地や釉調、呉須の発色は17世紀頃のベトナム国内向け大型燭台に近い。注文制作か、あるいは「見立て」によるものかもしれない。

c．日本で生産された「安南手」

５．染付魚文碗（安南手魚文茶碗）

高さ9.1、口径13.2、底径8.4
日本
M549安南茶碗 遊魚図

碗側面と見込みに魚を描いた染付碗である。割高台の内側は施釉され、染付の二重円圏と畳付きに沿った圏線がある。土味や高台の仕上げ方、素朴を狙った絵付けなどから、17世紀初めに日本の茶人が注文した一連のベトナム青花を念頭に、その後日本国内で生産された作と考えられる。年代、生産地の特定は難しい。

6．染付人物文碗（安南手人物文茶碗）

高さ8.3、口径11.5×12.0、底径7.1×7.4
日本
M550安南茶碗 銘上楽和下睦

側面に文字が書かれているが判読が難しい。箱覆いには「上楽和下睦」とある。高い高台が付き、筒形に近い姿で口縁が反った碗形は、15～16世紀のベトナムの碗・鉢の一典型に倣ったものである。見込みに環状の釉剥ぎがあるものの、本来の目的である重ね焼きには役立たない。土味や釉調から見ても、M549同様に日本国内産の「安南手」と考えられる。

7．染付船文碗（安南手茶碗　銘入船）

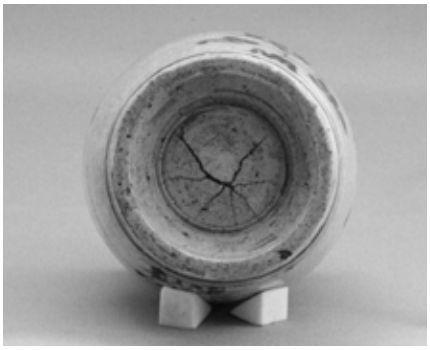
高9.5、口径12.0、底径6.9
日本
M551安南茶碗 銘入船

側面に舟に乗った人物などが稚拙な筆致で描かれた染付碗。戯画風の人物や簡便な草木の表現は、すでに15世紀後半のベトナム青花に見られる。高い高台に筒型の碗が載った姿や高台内前面に鉄銹を塗る手法は「安南」の特徴を反映したものであるが、高台の仕上げ方や土味、釉調などから見て、日本国内産であろう。木村定三による「入船」という銘を持つ。

８．染付人物文碗（安南手人物文茶碗）

口径12.8、高さ8.4、底径6.8
日本
M568安南茶碗 天下安楽花鳥童子図

側面に「天下安楽」の文字と人物が描かれている染付碗。戯画風の絵文様は、15世紀ベトナム青花に散見されるが、17世紀中葉の中国民窯青花の影響も考えられる。乳白濁の釉薬で、白化粧はない。「天下」は日本人が好んで使う言葉であり、日本で作られたと想像される。



９．染付花鳥文壺（安南手花鳥文壺）

高さ9.5、口径6.5、胴径8.0、底径6.1
日本
M2244安南染付花鳥文落葉小壷

茶器向きの形と大きさ、情趣のある文様の染付壺である。土味や釉薬はベトナム青花とは異なっており、「安南」のイメージに沿って日本国内で作られたものであろう。

d．近現代に将来されて「見立て」により茶道具となったもの

10. 鉄絵碗（宋胡録鉄絵小服茶碗）

15世紀初め
最大高5.5、口径11.5×10.2、底径4.9
タイ、スコータイ窯
M813小服茶碗

スコータイ窯の製品は砂粒の混じった粗い灰褐色の素地に厚く白化粧を掛け、簡素な鉄絵文様を描くのが特徴である。これほど歪んだ碗を製品として国外に輸出した例は管見ではない。窯跡出土品が20世紀後葉の東南アジア陶磁ブームのもとで日本に運ばれてきたもので、その姿の情趣と大きさから木村定三が小服茶碗として取り上げたのであろう。

11. 灰釉鉢（建水　銘 撃竹一声）
10～11世紀

高10.2、口径12.7～13.7、底径9.2
クメール
M1377クメール黄釉建水 銘撃竹

クメール陶器の最盛期11世紀後半から12世紀前半には、白く精錬された素地に僅かに黄色や緑色を帯びた透明釉が掛かった端正な灰釉陶が登場する。この建水はその好例で、金属器の影響を感じさせる突文帯が裾に効果的に配され、緊張感ある姿になっている。クメール陶磁は宗教（ヒンドゥ教・仏教）用の器物に特化していたと考えられている。銘「撃竹一声」は竹の節を連想させる器の姿と仏教ひいては禅宗のイメージから生まれたのであろう。

12. 青磁鎬文双耳小壺（宋胡録青磁振出）
15世紀

高さ7.8、口径2.4、胴径7.0、底径3.6
タイ、シーサッチャナーライ窯
M1401宋胡録青磁振出し

シーサッチャナーライ窯の青磁は15世紀を中心に生産されたため、タイとの本格的交流が16世紀以降になる九州以北には渡ってきていないようで、伝世、出土ともにほとんど例がない。この振出は、近代以降に日本にもたらされたものの中から茶道具に取り上げられたのであろう。タイの青磁双耳壺は大小様々で、形もより細長いものが多い。本作のように腰の張った力のある姿と振出に合う大きさの作は得難い。

13. 五彩花文合子（紅安南花文合子）
15世紀

総高4.8
（蓋）高さ1.7、口径6.8
（身）高さ3.2、口径6.0、底径3.3
ベトナム
M1572安南手香合

全体を一つの花あるいは蕾に見立てたような形と文様の合子で、ベトナム五彩の典型作である。ベトナム五彩は青花を伴うことが多く、上絵が大変落ちやすいのが通例で、本作もわずかに痕跡が残るだけである。全体にかせているので、あるいはホイアン沈没船などの海からの引き上げ品かもしれない。茶道具としてみれば、あでやか過ぎないのがよいのかもしれない。

14. 鉄絵花文合子（宋胡録鉄絵合子）
15世紀

総高2.8
（身）高さ2.1、口径3.4、底径2.6
（蓋）高さ1.0、口径3.9
タイ、シーサッチャナーライ窯
M2390シャム 宋胡録 鉄絵草文香合

タイの鉄絵合子は「宋胡録」と呼ばれ、茶道で愛されてきた。この合子には通例の鈕や面取りがなく、丸々としている。描かれている文様は碗鉢類に従文様として登場するが、主文様で全体を覆うことは珍しい。失透気味の透明釉は16世紀シーサッチャナーライ窯の鉄絵によくみられる。愛らしい珍品である。

（2）鑑賞陶磁

15. 青磁花文盤（せいじかもんばん）

15～16世紀

高さ7.5、口径29.1、底径11.8
パーン窯
M1469パーン青磁花文盤

チェンマイ周辺で15～16世紀に活動したとされるパーン窯の青磁盤の優作である。見込みに特徴的な花文を櫛描している。ただ、パーン窯の多くは無文であり、このような花文のある作は愛好家好みとして20世紀後半に日本にもたらされたものが多い。高台内のトチン跡に見るように、窯道具や窯の形式にはシーサッチャナーライ窯との共通点が多い。

16. 黒陶刻線文鉢（こくとうこくせんもんはち）
バンチェン前期

高さ21.2、口径24.9×27.5、胴径27.2×28.8、
底径14.0×14.8
タイ
M1707バンチェン黒陶大碗

タイ北東部のウードンタニ―県バンチェンの新石器時代の墓葬遺跡で発見された土器で、独特の刻文のある黒陶は紀元前2000年期～紀元前1000年期中葉のものとされている。高い脚が付くことが多いが、本作の脚は後補かもしれない。

17. 青磁面取双耳瓶（せいじめんとりそうじへい）
15～16世紀

高さ23.6、口径4.5、胴径14.6、底径10.1
タイ、パーン窯
M1711宋胡録 面取壷

袋状にすぼまった口と二つの耳が付いた胴長の青磁壺といえば、シーサッチャナーライ窯の製品がほとんどであるが、本作は手取りや土味、釉色、腹部の面取りの様子が異なっている。パーン窯としたが、ミャンマー産の可能性もある。

18. 青花菊花文盤（せいかきくかもんばん）
15～16世紀

高さ6.8、口径33.3、底径23.6
M1719安南染付菊花大皿

白化粧をした上にコバルト顔料を使って、菊文など花文を見込みに、外側面に蓮弁文を簡便な筆使いで描いている。口縁を釉剥ぎにしているのは二つの盤の口縁と口縁を合わせて窯詰めするためである。高台内は鉄銹を渦状に塗布している。15世紀後葉から16世紀前葉にかけて量産されたベトナム青花の典型作である。

19. 青磁褐彩鬼神文塼（せいじかつさいきじんもんせん）
15～16世紀

高さ31.2、幅45.0、厚み10.5
ミャンマー
M2387ビルマ 青磁褐彩鳥二獣神像■ 台付

ミャンマーには寺院や仏塔、僧院の堂宇の裾を釈迦にまつわる説話を描いたタイルで装飾する伝統がある。多くは低火度釉を掛けたタイルで高火度の青磁や褐釉の例は珍しい。仏陀の悟りを邪魔する鬼神たちを自由奔放に描いた例はバガンにもバゴーにもあるが、バゴー周辺のタイルは大型である。

20. 褐釉鳥（かつゆうとり）
15～16世紀

高さ3.7、縦4.5、横3.3
タイ、シーサッチャナーライ窯
M2391シャム 宋胡録 親子鳥

タイの各窯ではM2391～M2394、M2402・M2403、M2839のような小さな人形が焼かれた。鳥や牛、象、シーサッチャナーライ窯では人物像などが多い。玩具の可能性もあるが、人物像の場合は男女和合や親子の授乳姿などもあるので、おそらくは寺院への奉納用に作られたのではないだろうか。

21. 褐釉鳥（かつゆうとり）
15～16世紀

高さ3.7、縦・横5.3～5.5
タイ、シーサッチャナーライ窯
M2392シャム 宋胡録 褐色四羽鳥

22. 青磁鳥（せいじとり）

高さ8.0、横5.5、縦6.0
タイ、シーサッチャナーライ窯
M2393シャム 宋胡録 青磁鳥

23. 褐釉象（かつゆうぞう）

15〜16世紀

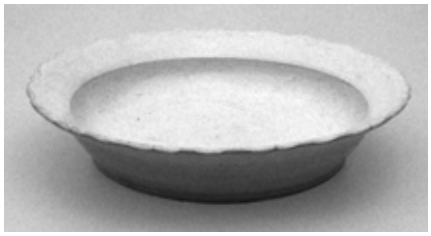
高さ6.5、長さ5.9、幅3.6
タイ、シーサッチャナーライ窯
M2394シャム 宋胡録 仔像

24. 鉄絵小壺（てつえこつぼ）・灰釉小壺（かいゆうこつぼ）

15～16世紀

右：（鉄絵小壺）高さ3.7、口径1.0、胴径3.0、底径2.0
中央：（鉄絵小壺）高さ3.5、口径1.5、胴径2.9、底径2.1
左：（灰釉小壺）高さ2.6、口径1.4、胴径2.6、底径2.2
タイ、カロン窯
M2395シャム タイ北部カロン窯 小壷3個

このような小品もよく見かける。奉納用か玩具と思われる。小さくても手を抜かず丁寧に作られている。

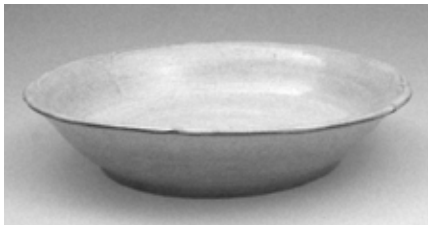


25. 白釉花弁文盤（はくゆうかべんもんばん）

15～16世紀

高さ5.5、口径27.5、高台径18.7
ミャンマー
M2397メソット 白釉輪花皿

M2397・M2398は1980年代の半ばに、タイのメーソットからミャンマーにいたる国境地帯に広がる未知の墓葬遺跡群から発見された錫釉陶器の典型である。最近、モーラミャイン近郊のコードンで近似の錫釉陶器や青磁を焼いた窯の存在が確認された。堺環濠都市遺跡や長崎から同種の錫白釉盤が出土しており、朱印船貿易時代の日本との関係を示唆している。



26. 白釉花弁文盤（はくゆうかべんもんばん）
15～16世紀

高さ4.7、径21.4、高台径13.7
ミャンマー
M2398メソット 白釉花弁皿

27. 青磁花文盤（せいじかもんばん）
15～16世紀

高さ6.9、径33.5、高台径20.2
ミャンマー
M2399メソット 青磁刻花文盤

21世紀になって研究が進んできたミャンマー青磁の例である。北方タイのパーン窯や晩期シーサッチャナーライ青磁と、緑がかった釉色や窯詰め法が似ているが、高台内に静止糸切痕があるという特徴がある。繊細な線彫り花文が見込みを飾っている。モールミャイン周辺の産と考えられる。

28. 牛（うし）
15～16世紀

タイ、カロン窯
M2401タイ北部 カロン鉄絵仔牛5個

M2401・M2402もM2391～2394同様に奉納用と考えられる。

29. 青磁コブ牛（せいじこぶうし）
15～16世紀

高さ8.3、縦9.5、横幅4.2
タイ、バーン窯
M2402タイ北部 バーン白磁コブ牛1個

30. 建築装飾（けんちくそうしょく）
15～16世紀

高さ30.2、横幅10.0、奥行き9.3
タイ、シーサッチャナーライ窯
M2406タイ 白釉塔

　シーサッチャナーライ窯ではこのような建築装飾を焼造している。屋根の棟や先端を飾る瓦の一種であろう。

31. 青磁花文盤（せいじかもんばん）

15～16世紀

高さ6.8、口径26.6、底径11.5
タイ、バーン窯
M2407タイ スコータイ バーン青磁輪花太陽文皿

M1469同様にバーン窯の盤である。盤といっても深く高台径が小さいので、大きな浅鉢といった姿である。釉がよく融けており、特有の美しい青磁色となっている。

32. 貝：陶製法螺貝（とうせいほらがい）　＊人物は不明

11～12世紀

（貝）縦17.4、最大径9.2
（人物像）高さ3.5、横幅1.9、奥行き2.0
クメール
M2409クメール 無釉法螺貝 アユタヤ小女人像付

法螺貝はクメール陶器で宗教儀式において聖水を注ぐものとして多く作られた。青銅器製も残っている。本作がクメール陶器なのかは不明。クメール陶器はタイ陶磁に影響を残しているので、大きく見るとクメール陶器といってよいのかもしれない。

33. 焼締め人形（やきしめにんぎょう）

高さ18.9、幅17.1、奥行き8.8、底径17.0×8.0
アユタヤ
M2410アユタヤ 鳥を抱く親子像

俗に「アユタヤ」といわれる土器製の人形で、寺院への奉納用と考えられる。長く続く伝統なので、形式変化は少なく、年代特定は難しい。

34. 焼締め人形（やきしめにんぎょう）

高さ14.5、幅21.4、奥行き6.9
アユタヤ
M2510アユタヤ 鳥を抱く人物像

35. 褐釉象（かつゆうぞう）

15〜16世紀

高さ7.7、縦6.3、幅5.0
タイ、シーサッチャナーライ窯
M2839宋胡録 褐釉 象と人物

36. 瓶（びん）

（右側）高さ13.0、口径6.0、胴径6.8、底径6.5
（左側）高さ12.7、口径6.5、胴径7.0、底径6.8
産地不詳
M2853華瓶一対

37. 黒褐釉鳥飾水注（こくかつゆうちょうしょくすいちゅう）
12～13世紀

高さ12.9、口径4.3、胴径20.8、底径12.3×12.5
クメール
M2901クメール 黒釉水注

クメール黒釉陶器の典型作である。天辺に小さな口、肩に小さな注ぎ穴が付いた扁平な水注である。大きな嘴を持った鳥の装飾を伴う小さな把手が付くことが多い。よく張った腹部と、小さな口や装飾付把手は緊張感ある姿を創り出しており、黒々とした釉薬と相まって、堂々とした作品になっている。

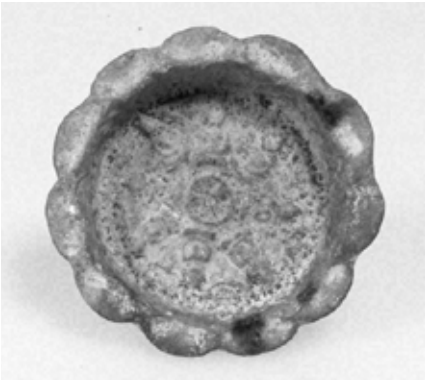
38. 陶製魚（とうせいぎょ）

（鯤）高さ5.1、径17.2
（塼）高さ1.9
産地不詳
M2903-1アユタヤ 鯤

M2903は、土着の生活に密着した小品である。鳥形笛などは寺院奉納用か、玩具の類と考えられる。このような小品を作っているのはタイがほとんどである。年代や産地を特定するのは難しい。

褐釉水鳥型笛（かつゆうみずどりがたふえ）

（水鳥）８点
高さ1.5〜1.8、縦2.8〜3.9、幅1.3〜1.7
タイ
M2903-2アユタヤ 水鳥（笛）



陶製八仏文皿（とうせいぎょはちぶつもんさら）

高さ1.8、径6.4
アユタヤ
M2903-3蓮華小皿